



エフタの帰還 Giovanni Antonio Pellegrini

一人の男、エフタが登場します。彼は非常にデリケートな立場であったことが最初に記されています。父はマナセの半部族のギレアドの息子でしたが、遊女に産ませた子どもでした。そのため、エフタの弟たちはエフタが長子であっても財産相続を許したくないので、エフタを追い出してしまったということです。エフタは兄弟たちから逃れて更に東のトブに住みましたが、彼の元にはならず者が集まり、彼と行動を共にしていたのです。

イスラエルはまたも「主の目に悪とされること」を行いました。そして、ギレアド(地名・ヨルダン川の東側)に、アンモン人が陣を敷き、イスラエルと対峙しました。ギレアドはマナセの半部族とガド族の嗣業の土地でしたが、アンモン人を迎え撃つ指導者がなかなか与えられませんでした。そこで思い出したのがエフタでした。ギレアドの長老たちは「指揮官となってアンモン人と戦って下さるなら、あなたに私たちギレアド全住民の、頭になっていただきます」と丁重に願い出ました。びっくりしたのはエフタです。「のけ者にされ、追い出され、今更何を？」と反駁しますが、懇切丁寧に依頼され、エフタも心が揺れました。そこで何度も条件を確かめ、確認し、引き受けることにしたのです。

その後のエフタの姿はならず者ではなく、まるで優等生です。敵のアンモンの王に使者を送って陣を敷いた理由をまず問い質しました。すると「イスラエルがエジプトからやって来て、奪った土地を平和に返還せよ」と回答がありました。エフタは出エジプトの行程を正確に伝えました。「アンモン人の国境まで行ったが、堅固が固かったので侵入しなかったこと、ただ、戦いを挑んだアモリ人を破り、彼らの土地を手に入れたことは正当なことであり、何も間違っていない」と堂々と論駁しました。けれどもアンモン人はこれを受け入れようとはしませんでした。エフタは神に祈り、戦うことに心を決めました。そして、戦勝を願い、ならず者だった「粹がる」エフタは、つい、とんでもない誓いをしたのです。

「もしあなたがアンモン人をわたしの手に渡して下さるなら、わたしがアンモンとの戦いから無事に帰るとき、わたしの家の戸口からわたしを迎えに出て来る者を主のものといたします。わたしはその者を、焼き尽くす献げ物といたします。」(士 11:30-31)

人身御供は律法で禁じられています。(レビ 18:21/20:2 申 12:31/18:10) エフタは神が共にいて戦って下さることを求めず、人間の約束をあてにして、また、自分の力を頼ったのです。



エフタの娘の嘆き

George Hicks

エフタはアンモン人を徹底的に撃ち、勝利しました。そして、凱旋してくるエフタを、鼓を打ち鳴らし、踊りながら、真っ先に出迎えたのは彼の一人娘でした。取り返しのつかない誓いをしたエフタの驚き、苦しみは大変なものでした。娘は「父上。あなたは主の御前で口を開かれました。どうか、わたしを、その口でおっしゃったとおりにしてください。主はあなたに、あなたの敵アンモン人に対して復讐させてくださったのですから。」(士 11:36)

と気丈に父の信義を守るため、身を捧げると言ったのです。娘は昔の父の立場がどんなに惨めだったかを知っていました。この先ギレアドで士師となる父の名誉のために、父への愛を貫いたのです。娘は山をさまよいながら友人たちと最後の別れの時を持ちました。純真な愛に裏付けられた娘の言葉は、エフタを生かします。けれども力を誇示するための言葉は愛を奪ったのです。その後の日々をエフタは痛恨の思いで過ごしたことでしょう。